

今月のみことば 2016年11月

「信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。」
(マルコの福音書16章16節)

「ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った、『人に従うより、神に従うべきです。』」
(使徒の働き 5章29節)

命がけの洗礼

教会に集っていて一番嬉しいことのひとつは、洗礼(バプテスマ)を受ける人が与えられることである。この信仰のスタートが祝され、地上を去るその日まで信仰の旅路を全うされるように、と心から祈らずにはいられない。

しかし、猫も杓子も幼児洗礼を受けることが常識であったヨーロッパにおいて、クリスチャンとしての自覚を持って再洗礼を受けることが命がけの時代があった。

再洗礼主義とは

- (1) 洗礼を受けるのは信仰を持った者でなければならない
- (2) 政府から特定の宗教的信条を強要してはならない

という、今日で言えば当たり前のことを言ったにすぎない。しかし、そのために受けた迫害は、ローマ帝国時代の迫害よりも苛烈であった、と歴史家たちは言う。

再洗礼を奉じる者は火刑、または斬首にされ、またそのお尋ね者として賞金が懸けられた。彼らをかまくったり、食物を与えたりした者も罰せられた。

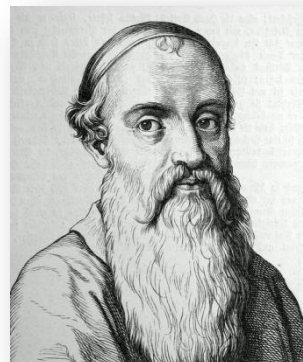
この再洗礼派の指導者の一人が、メノー・シモンズ(1496-1561)である。もともとは、司祭でありながら酒場でビールを片手に、もう一方の手でランプ遊びをする人であった。ところが、叙階から二年後、あることがきっかけで初めて聖書を真剣に読み始める。そして読み進むうちに、次々と知る聖書の真理から目を背けることができなくなった。そして安逸な生活を捨てて、再洗礼派の群れに加わったのである。

「再洗礼派の牧師給とは、火と剣、そして死である」とシモンズは後に記している。彼の及ぼした感化は深く、メノナイト(メノー派)と呼ばれる教会の源流は、実にここにまでさかのぼる。

何もわからない幼児の時に受けた洗礼を無効とし、大人になってから自覚的に洗礼を受ける、ということがなぜこれほどの重罪とみなされたのであろうか。信仰に関して国家の統制を受けず、聖書のみに従う、という再洗礼派の人々が為政者の権威を脅かす危険な存在に映ったであろうことは想像に難くない。

原語の「バプティゾー」(動詞)には、「浸す」「一体化する」という意味がある。それは、染料に布を浸すときにも使われた。布が染料と同じ色に染まるように、罪なき神の御子の義をわが義とし、キリストの死をわが死とし、キリストの復活をわが復活とする、というのはまさに洗礼(バプテスマ)の真髄である。

その霊的現実を表す洗礼が現代のように自由にできるようになるまでには、信じられないほどの犠牲があった。「なぜそこまでして洗礼の仕方に固執するのか」と問う声が聞こえてきそうである。しかし、それに対するメノー・シモンズの応答もまた明らかなように思われる。「人に従うより、神に従うべきです」と。



メノー・シモンズ